

三愛 view

発行所：三船病院相談室
創刊日：2003年8月15日
〒763-0073
香川県丸亀市柞原町 366
Tel 0877-23-2341
Fax 0877-23-2344

『三船病院の感染対策について』

看護副部長 三浦 幸子

新型コロナウイルスは令和5年5月8日から感染症法上の扱いが2類感染症から5類感染症になり季節性インフルエンザと同じ扱いとなりました。しかし5類感染症となっても感染対策の内容は変わりません。冬の時期に多く感染症が流行していた時代から現在は季節関係なく流行しており、今年は猛暑の時期でありながらインフルエンザや新型コロナウイルス、百日咳が流行しているニュースを目にします。

感染予防において大事なことは、感染源である病原性の微生物(ウイルス、細菌、カビを含む真菌など)の排除を行うことです。さまざまな汚れ、血液や体液、おう吐物や排泄物なども感染源となります。医療施設的环境には、さまざまな病原体が存在しているため、病原体を除去して清潔な環境を患者様に提供することが重要です。もう一つは感染経路を断つことです。空気感染・飛沫感染・接触感染などの感染経路があり、それぞれに応じた予防対策が必要になります。病原性微生物は目に見えないため完全に排除することは難しいですが、いずれの経路も、持ち込まない、持ち出さない、広げないことです。予防策の中で誰でもできる石鹸での手洗いやアルコール消毒による手指衛生は、感染対策の基本となります。今では地域でマスクを着用している方の割合も少なくなっており、当院においても職員や入院患者様、外来患者様や面会の方へのマスク着用を義務ではなく任意としております。しかし三船病院職員のほとんどが、任意にもかかわらず現在もマスク着用したまま勤務しております。また職員は免疫力が低下しないよう栄養や睡眠・休養を取り、適度な運動で体力をつけて健康管理にも気を付けています。

職員は体調不良があれば勤務前には報告する体制をとっており、自分自身が感染源となり、院内に感染を広げることがないようにと、常に心掛けています。その他、感染予防として毎年インフルエンザワクチン接種を、全職員や入院患者様、通院患者様に対して接種できるように病院としても働きかけています。病院の取り組みとしては、感染対策を強化していくために、手指衛生をテーマに、繰り返し研修を実施しています。

また国立病院機構四国こどもとおとなの医療センターの感染管理認定看護師に、当院の環境をチェックしていただいています。私たちが気づかなかったところの指摘を受けることで、その改善策を考え、安全な環境になるように取り組んでいます。指導された内容を元に、月に4回、医師、看護師、薬剤師、検査技師、管理栄養士、事務職がペアで、院内ラウンドを行い、安全な環境が維持できているかを確認しています。

今年度、三船病院看護部の取り組みとして、院内感染管理認定看護師を育成することにしました。講師として国立病院機構四国こどもとおとなの医療センター 感染管理認定看護師 加藤望美先生を講師として招き、医療関連において感染予防・管理に必要な知識と技術が習得できるように計画しています。

初めての試みなので、まずは、看護管理者が受講し、院内感染管理認定看護師になることを目指し学習していきます。来年度は、看護管理者以外の院内認定感染管理看護師を増やしていき、三船病院看護部としては感染管理のリーダーシップを発揮し、感染対策の強化、看護の質向上に貢献することができるようしていきたいと考えております。





『災害対策訓練について』

事務長 北村 直幹

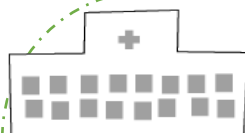
昨今、日本だけでなく世界中のどこかで自然災害(地震、水害・風災等異常気象 etc.)が発生し、人々の生活に甚大な被害がもたらされています。こうした自然災害は地球温暖化の影響によるものが多く、人類の進化と共に地球環境が変化していったいわば人災ともとれるものです。こうした災害への備えをすることは企業経営において重要案件であり、発災後の経営への影響度が大きく変わってきます。

災害への備えとして「災害対策訓練」はその最たるものであり、考えられる最悪を想定して行います。電気、水道、ガス等のライフラインが停止し、建物への直接的な被害、患者様や職員への人的被害、情報が錯綜し周囲の状況が把握出来ない状況下での病院運営継続有無の判断、継続出来る状況にある場合のフローマニュアルどおりに動けるか、食料や医薬品等の備蓄品は足りているかの確認、怪我人の救命救急処置等現時点でどの程度対応出来るかを見極めることが出来ます。

三船病院では現在「災害対策訓練」の実施に向けた取り組みをしています。

今当院において最大被害が想定されるのが「南海トラフ巨大地震」の発生です。30年以内の発生確率は80%を超えているとも言われています。巨大地震を経験した人は少なく、発災後どういった状況になるか誰も分かりません。香川県は有難いことにあまり大きな災害の発生が少ない地域であり、防災意識という点ではあまり高いとは言えません。ですが何の備えもなく、突然災害に見舞われると人はパニックに陥り、普段どおりの判断や行動ができにくくなります。そうならないため、少しでも普段に近い判断や行動ができるようにするためにも「災害対策訓練」をする意義があるのです。

昔から「備えあれば憂いなし」と言いますが、今まさに事前準備が必要な時期に遭遇していると言えます。災害は突然やってきます。発災時の被害を減らす意味でも「災害対策訓練」を実施し、患者様や職員の不安を少しでも払拭できればと考えています。



三船病院医師からのメッセージ...



『精神科医はAIにとってかわられる?』

副院長 藤井 聡

近年、AI(人工知能)の進化は目覚ましく、将来多くの職業がAIに取って代わられると言われています。医療の分野でも診断支援や画像解析などにAIが活用され始めています。こうしたなか、精神科医は「AIに取って代わられにくい職業」とされてきました。人の心は複雑で、精神科医療には人と人との関係性が欠かせないからです。

ところが最近状況が変わってきました。人々のAIの利用目的に変化が見られ、若い人を中心にAIを相談相手として使うことが増えてきています。深夜にふと不安になったとき、誰にも言えない思いを抱えたとき、AIに語りかけるのです。AIは「感情的な安定さ」があり、疲れたり、イライラしたり、反論したりしません。どれだけ話しても常に冷静で「共感」し、優しくしてくれるため、安心感を抱く人も多いようです。また、24時間どこでもアクセス可能という強みがあります。

こうした状況から今年の日本精神神経学会でも「AIによる精神療法の可能性」が取り上げられました。

しかし、今のところAIの「共感」は“共感的ふるまい”であって真の共感ではありません。精神科医療で大切な「沈黙の意味をくみ取る」「表情や声のわずかな変化やその場の空気を感じ取る」といった非言語的なコミュニケーションもAIはまだ苦手なようです。また、人としての医療者が感情的に揺れることも悪いことばかりではありません。

いずれにしても今後AIが精神科医療の力強い味方になることは間違いありませんので、上手に活用したいものです。AIの進化はまさに日進月歩。このコラムも1年後、いや、もしかすると刷り上がる頃には古い話になっているかもしれません。

【三愛会 コミュニティケアセンター】

【地域活動支援センターはなぞのの現在と今後について】

精神保健福祉士 船井 未央

地域活動支援センターはなぞのは、地域で生活をされている障害を持たれている方を対象に、活動の場やいいの場の提供、生活の中で困っていることの相談の場の提供などを行っています。今回は、現在のはなぞのが取り組んでいる2つの活動を紹介します。

1つめは、「在宅生活訪問活動(個別訪問・相談)」です。個別訪問では受診、市町への手続き同行、活動参加のための送迎サポートなど、既存のサービスでは対応が難しいことなどを支援しています。個別相談では、日々の悩みごとや困りごとを相談する場として利用していただいています。2024年度は、個別訪問90件、個別相談101件と毎年度増加しており、在宅生活を支える活動としてのニーズは大きいため、今後もニーズに対応していけるよう努めていきたいと思っています。

2つめは、今年度より新規活動として「地域とつなぐメンバー作品応援事業」を実施しています。この事業は利用者が製作した手芸作品等を地域バザーや展示会場などに積極的に出展し利用者の社会参加の場となり、やりがいにつなげることを目的としています。具体的には郵便局内の販売スペースを利用して手作り作品の販売、地域の社会福祉協議会へ利用者が作った野菜の寄付などのつなぎを行っています。小さなことではありますが、利用者にとってはご自身が作った作品が地域で役立つことで喜びにつながればと思っています。

今後も機会があれば利用者が日々取り組んでいることを発信していける場ができるよう支援します。



『活気ある通所リハを目指して』

福寿荘 通所リハビリテーション 介護福祉士 齋藤 誠良

私たち通所リハビリテーションでは、さまざまな活動やレクリエーションを通じて利用者の皆様に充実した毎日を楽しんでいただくことと、少しでも長くご自分の居場所である自宅で過ごしていただくために利用者一人ひとりの生活環境や身体能力に合わせて、理学療法士や作業療法士がリハビリテーションプログラムを作成しています。

活動内容の一例として、季節に応じた野菜の栽培を行っており、現在はさつまいもを育てています。収穫に向けて利用者と水やりをしたり、畑の詳しい方にアドバイスをいただきながら、一緒になって育てています。秋の収穫を想像し、できたさつまいもをどう料理するかなどで利用者とのお話も盛り上がります。

また、手作りのおやつ作りは人気の活動のひとつで、おはぎやロールケーキ、カップ寿司等みんなで協力しながら、おいしくて安心なおやつを楽しく作っています。

その他のレクリエーションでは、バランスゲームや脳トレーニングなど、身体と頭をバランスよく使うプログラムを実施しています。時には、冗談を言い楽しみながら心身の健康の維持、認知機能の向上を目指しています。

これからもいろいろな活動を行いながら、家庭的な雰囲気の中で笑顔に満ち、みなさんが活気にあふれるようなケアを心がけていこうと思います。



三愛会 トピックス



《編集後記》

ようやく秋の気配を感じられるようになってきましたが、皆様いかがお過ごしでしょうか。一大イベントである三船病院夏祭りも盛況に終わり、ほっと一息ついているところです。季節柄、思春期相談、受診相談、入院相談の電話も多くあり地域からのニーズにお応えするべく日々奮闘しております。

今後も一人でも多くの患者様のご希望に添えられるよう、職員一丸となって努力してまいりますのでよろしくお願いいたします。

(三船病院医療相談室MHSW)